



TITLE:

傷心

AUTHOR(S):

能田, 忠亮

CITATION:

能田, 忠亮. 傷心. 天界 1924, 5(48): 29-30

ISSUE DATE:

1924-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160196>

RIGHT:

慢な言葉だらう!」彼は神經質的にかういつて「併し自己を解し得る偉大なる人間はやがて宇宙の征服までゆかなければウソだ。そこに人間としての誇りがある」こいつた。「でなければその偉大な人達の存在の理由がなくなる」尙彼は悲し氣に續けた『自己すら解し得ない自分が天文をやるとは誠に恥しい。そしてその道の方には却つて迷惑だこゝへ思はれるだらうふ。併し自分としてはさうするより外に生き方がない。それでたゞもう此の上は異常な耐忍と不斷の努力を以て人生の態度を確定する爲めに此の道に精進してみたい。もし人間こいふこゝゝ兩立し得ないものであるなら喜んでいつでも此の道を去らう、同時に地上から消え失せよう。實際私が人間であるこゝを忘れないで居るならば私は正に哲學科學以外の世界を發見するだらう。だつてさういふ氣がするんだ。もしさうでないとするこゝ茶代舟賃を忘れた旅人に過ぎないもの。又私が生活こいふ事を忘れないで居るならば私はその墓場を見付けおかう。でないこゝ私は野たれ死をするもの。實際私は死に面して、尙人の子こゝして社會の人こゝして世界の人こゝして自分の過去をふりかへつてみるだけの時間が與へられるだらうか。思つてみてもゾットする。』彼の獨り言は何時迄経つてもやみさうもない。可愛想に彼はそんなこゝばかり考へて居て折角學校へ講義をきゝに出ても多くボカンこゝして居る。そして學校制度こいふものに強いて自己を合はしてゆく事の誠に

拙い事をかこつて居る。

最後に彼はいつた「此の天文の教室が學校それ自體であるとしたら稍理想に近い學校になるだらう。こんな教室に御親切な諸先生、先輩方の指導を受ける事を愉快に思ふ」こゝ。そして彼は『だから私はもつこもつこ勉強しなくては』こゝ、心には思つて居ていふのだらうけれごちつこも實行しない。彼が實際如何に今後を切り抜けてゆくか私は暫く彼のする事を黙つてみて居よう。そして彼の最も妨ぎな言葉を以て私は此のお話をやめるこゝしよう。

Tout annonce d'un Dieu l'éternelle existence,

On ne peut le comprendre, on ne peut l'ignorer:

La voix de l'univers annonce sa présence,

Et la voix de nos cœurs dit qu'il faut l'adorer.

傷 心

能田 忠亮

冬の弱々しい朝日を受けて地球は世の喜びも、悲しみもありこあらゆる人生の諸相をのせたまゝ、何の躊躇もなく同じ旅路を辿り初めた。もの心ついて以來、初めて靜かに、年を送り迎へた私は、餘りの平凡さに、フト過ぎし日の痛々しい

存在を、思ひ起さずには居られなかつた。

刺す蚊をば手に打ちかねて涙かな。

こうした氣持ちで、凡そ自分に與へられた運命なら、何でも甘受してきた。そして色々を考へあぐんでは、結局もう此の上は、餘計な穿鑿はすまい。只自分に許された唯一の道に身命を捧けて精進すればそれでよい。一人きりにしてはせめてもの心やりをするのがオチだつた。今こゝに二十有餘才の春を迎へても矢張り昔乍らの私以外の何物でもないとしか思へぬのを淋しがらずには居られない。

あすならう日ごみ檜の夢を見て。

かうして今日は明日はこ一生を碌々として送つてしまふ様になつてゆくのではないかしらん。そんな不甲斐ない生活から逃れ出る事が出来ない自分だしたら？

私は自分自身を散々はちしてやりたい氣分で一杯になつた。餘りに靜かだつたお正月は却つて私に大きな憂愁を投げかけた。五時近くといふにもう日の光りの見られぬ此の薄ギタナイ町並をトボトボ歩いて居る内西方に明星の強くキラキラ光つて居るのを見た。急に身體中が清々するのを覺えた私は思はず「カアルブツセ」の「山の彼方に」を吟じてみた。するさすぐ、

たづねゆけ山又山を星一ツ。併し此の時又黒い影が心の中をカスめていつた。

三〇

ハーワード大學天

文臺の印象

ケムブリッヂにて 吉田源治郎

「古い！」こゝう云ふ感じが、ボストンのサウス・ステーションで山本一清氏の御出迎えを受けた時から、私の心に染みこんだ。これがオリバー、ウエンデル、ホルムスの誇る「太陽系の車輪」(ボストン)へ來た當初からの感じである。文明的の明るみの上に何だか古色蒼然たる氣分が蔽ひかぶさつてゐる。歴史のないアメリカの唯一つの歴史のある町！それがボストンだ。

ハーワードの天文臺の高臺を訪づれたのは八月二十五日の朝、臺内は其體中して人氣がない。山本氏の研究室の一隅に腰を下して、さて、つらつらに考へる。そこへ變光星のカムベル氏がいいつて來られる。山本氏の計算を手にして何か意見述べられる。三階造りになつてゐる臺内には、臺員一人一人に割り當てた部屋が、いくつもなくあつて、總計約四十人の臺員が活躍してゐる。その中、男子が五六人、あまはスツカリ婦人、その半分の以上は、五十を越したオールド、メイド、之れを引き廻して、研究の指揮をするのが年齢四